

日本古代史ネットワーク

古代史を解明する会

第24回 弱体の神武・勝利の理由

「弱体の神武は何故勝利を得ることができたのか？」

日時:2022年12月10日(土) オンライン開催

丸地三郎

弱体の神武は何故勝利を得ることができたのか？

- 「神武東征」/「大和政権成立直後に起きたこと」のテーマでは、弱体の神武が長脛彦とニギハヤヒの守る奈良/大和の地を勝ち取ったことを前提に話を進められて来た。
- 疑問
 - 「強いものが勝つ。」これが常識です。
 - 東征の軍を率いていた長兄の五瀬を戦傷で失い、熊野灘で嵐に会い遭難し、神武の二人の兄は遭難、率いていた船と兵員・装備の大多数を失ったはず。
 - 海難事故で、兵も装備も失ったはずの神武が、兵を集め直し、護りを固めた奈良へ進軍し、戦って勝つ。
 - こんな事は有り得ないと云うのが、前々回出た質問の主旨と思われます。
 - こんな有り得ない「空絵事」を書いているから神話は、信じられない。
 - 極めて的確な質問だと思います。
- 神武の戦いが成り立つ条件を探して見たいと思います。
 - 鍵となるのは「天羽々矢」と考えています。

神武東征のサマリー 古事記と日本書紀では少し違う

- 天孫族を率いた五瀬とその兄弟が神武東征を開始
 - 日向の地で、会議： 何処へ行けば国を治められるか？と問い、大和へ向かった。
- 経路/事象
 - 筑紫国の岡田宮 / 安芸国の多祁理宮 / 吉備国の高島宮
 - 浪速國の白肩津へ船を進め、上陸 竜田へ進軍/退却 生駒山へ進軍/退却
- 東から攻めると宣言
- 五瀬負傷/死亡
- 名草戸畔(なぐさとべ)を誅した
- 新宮で天磐盾へ登る
- 海でにわかには暴風に遭い遭難
 - 二人の兄は遭難
- 神武と子の手研耳命は荒坂津(丹敷浦)へ
 - 丹敷戸畔を誅した
- 武器・剣を見つけ大和へ進軍開始
- 吉野・吉野川へ
- 宇陀へ到着
- 戦いを重ね
- 大和を護る長脛彦を殺し、饒速日の命が降伏
- 都を定め・正妃を迎える・天皇即位





東征軍の状況

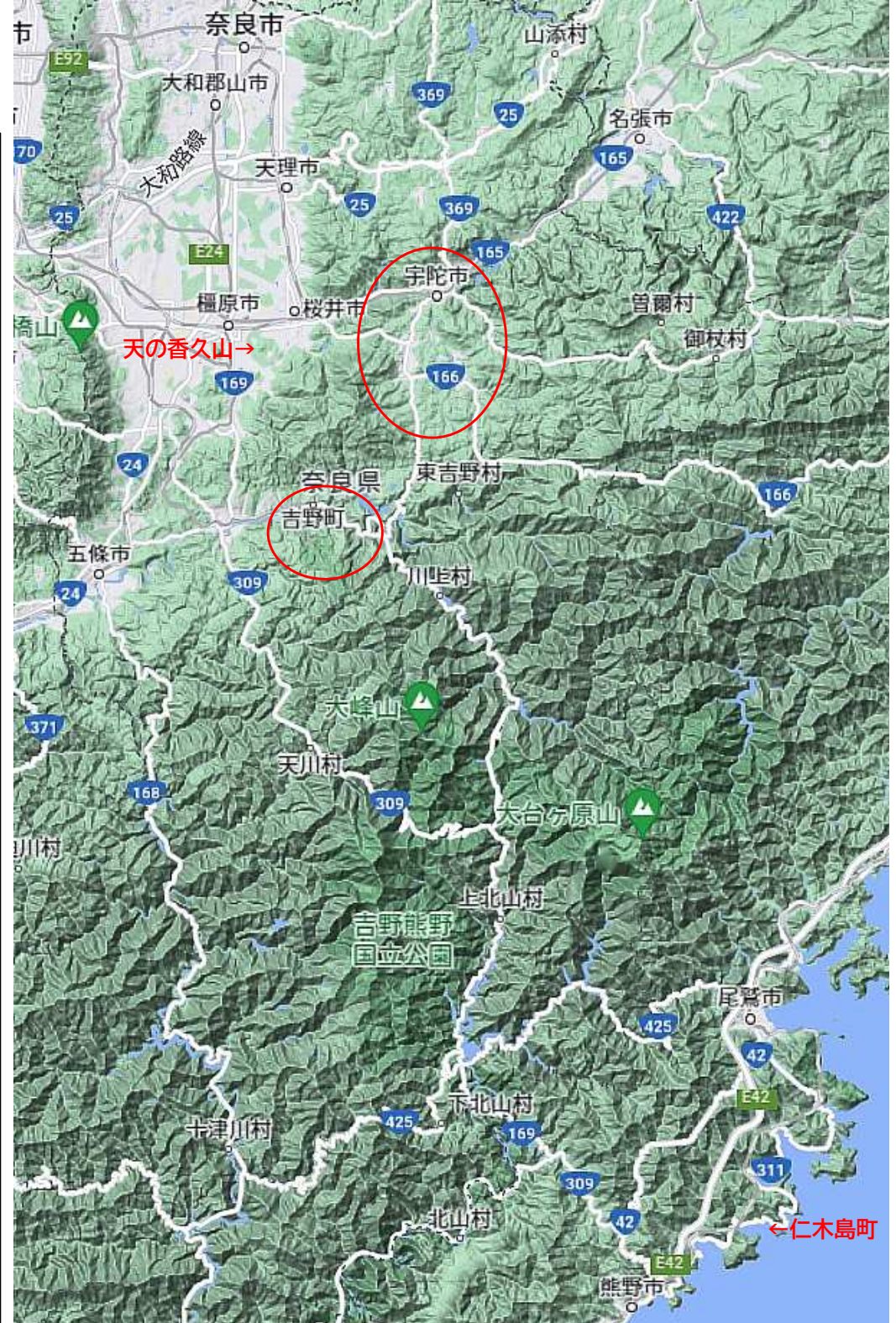
- 筑紫の日向から
 - 東征軍は、岡田宮で北九州の軍勢を集め、安芸・吉備で船と兵隊・装備を整え、大阪湾へ（3月10日：書紀）
 - 船で大阪へ向かった東征の兵員は数万単位と推定。鉄製の刀や弓矢など武器を装備。
 - 大和を守る饒速日命と長脛彦達は、大阪平野・生駒山地・和歌山方面に高地性集落群を築き、鉄製の武器を装備し、防戦体制を整えていた。
 - 通常の奈良への通路である大和川沿いの竜田地区へ向かった東征軍は、進軍できず敗退し、戻り、止むを得ず、山道を登る生駒山ルートを選び進軍。統率者の五瀬が負傷。（4月9日）
 - 東征軍は、東側から攻めるため、南の紀伊半島を回りこむルートを採った。
 - 和歌山付近で、統率者の五瀬が死亡。紀伊国の竈山に埋葬。名草 戸畔を誅む。
 - 残る三兄弟で指揮を執ったと推定。（5月8日）
 - 新宮の天磐盾へ登った記録は、ここまで、順調に移動してきたことを示す。（6月23日以降）
 - ◆ 東征軍の兵員数は数万で、鉄製武器で装備。
 - ◆ 大和防衛軍も、同レベルと推定。
- 熊野灘で遭難
 - 海の中にして、卒(にわか)に暴風(あらし)に遇(あ)いぬ。
 - 二人の兄(稲飯命と三毛入野命)は遭難/死亡。神武と息子など少数が荒坂津(丹敷浦)で救助される。
 - ◆ 東征軍はほぼ全滅か。
 - ◆ 神武一行は、やっと、生き延びた状態で、剣など兵装・武器を失った。
 - ◆ 人員は十数名と推定。

熊野から大和へ向かった神武一行

- 神武一行は、熊野灘での遭難で、東征の為に準備した兵員・装備・船舶を失った。
 - この海難事故で、生き残った神武一行の持ち物は？
 - 運よく生き残った彼らが所持できた物は、
 - 最低限の衣類。武器は短刀まで(鏡・剣は重く、無理)。
 - 軽量の貴重品(天羽々矢など)は、身に縛り付けて所持できた可能性は残る。
 - 神武達は、浜辺にたどり付いたときは
 - 所持品を失い、食料も無く、
 - 浜辺に住む人々の救助を受けた筈。
 - 荒坂津(丹敷浦)の住民の保護を受け、しばらく、体力の回復を行ったはず
- 高倉下が発見したと云う剣をどう考えるか？
 - あり得る答えは、
 - この海浜の集落の長が、海からの侵略者から防備するため武器を所有し、倉に保管していたものを高倉下が発見し、強奪したもの。
 - これが、私が理解する唯一の可能性。
- 丹敷戸畔を誅したとの書紀の記述があるが、丹敷の集落の女集落長を殺したと云うこと。
 - これは、助けた遭難者に大切な剣を盗まれ、盗んだ人々をなじった結果、逆に殺されたと考える。
 - 神武一行は、恩を仇で返したことになる。

熊野から大和へ向かった神武一行

- 丹敷の女集落長の家にあったものを強奪したとしても、
 - 普通の衣類(戦闘服では無い)を身にまとい、
 - 数人に一人は剣を持ち、出立したと思われる。
 - 旅行用の食料も十分に無いはず。
- 熊野から奈良県宇陀まで、車で、トンネルの多い整備された道を通り100km以上。山道・獣道を徒歩で通る道は数百km。
 - 最も雨の多い地帯の大台ヶ原に近く、標高1000mを越える山岳ルート。
 - 試行錯誤の後に、道案内人(ヤタガラス)を確保。
 - 食料を確保しながらの、サバイバル行。
- 古事記と書紀ではルート記述が若干違う
 - 古事記:吉野から紀ノ川の尻へ出て、宇陀へ
 - 書紀:宇陀へ出て後に吉野へ
- 宇陀(菟田)に到着した頃の神武一行
 - 神武一行は、10数人から数十人。1か月ほどのサバイバル行進を経ている。
- ひげは伸び放題、風呂にも入らず、汚れた身体、衣類は破れ、刀を持った「山賊」のような風体の集団であった筈。



吉野と宇陀で起きたこと

- 吉野河の河尻にて、(古事記・日本書紀で順序が違う)
 - 住民達が神武軍に参加
 - 魚を捕る国津神: 贄持の子、
 - 尾生る国津神: 井氷鹿(いひか)、
 - 国津神: 岩押分の子に会う。
 - 「今、天つ神の御子幸行でましつ、と聞きけり、故に参向へつるこそ」
- 宇陀にて、(8月2日)
 - 宇陀には兄宇迦斯(エウカシ)・弟宇迦斯(オトウカシ)の兄弟がいた。
 - まず八咫烏を遣わして、神倭伊波礼毘古命に仕えるか尋ねさせたが、兄の兄宇迦斯は鳴鏑を射て追い返してしまった。
 - 兄宇迦斯は、神武一行の体制を見て、戦わず、だまし討ちを計画。
 - 弟の弟宇迦斯は神倭伊波礼毘古命に、だまし討ちのことを報告した。
 - 兄宇迦斯は殺された。
 - 弟宇迦斯は神武一行に参加

◆ 疑問

- 吉野で、国津神達が、何故、山賊の風体をした集団に従ったのか？ 不思議。
 - 常識的には、外部から来た敵とは、戦うか排除するはず。
 - 何故、従ったのか？ 噂を聞いて、国津神が出てくる(参向へつる)ことも疑問。
- 宇陀の兄弟は、宇陀の統治者。大和の饒速日命/長脛彦から支配を受けているはず。
 - 大和を攻めに来た「山賊様の集団」は、兄弟の敵として排除/殺戮すべきもの。
 - 神武一行がそれなりの体制だったことは、吉野などで、兵を集めていたことを意味し、何故集められたのか疑問。

饒速日命の帰順から即位まで。

- 12月4日:饒速日命帰順
 - 天孫の印(天津端):天羽々矢(アメノハハヤ)と歩鞞(カチユキ=矢を射れる筒がユキ)
 - 長脛彦の使者:天孫の印を持っているか?と問う。有りと回答。饒速日命のものを見せろ。
 - 長脛彦:饒速日命の「天羽々矢と歩鞞」を見せる。
 - 神武:本物だ!その後、神武の持つ「天羽々矢と歩鞞」を見せる。
 - 饒速日命:長脛彦を殺し、神武を訪れ、帰順した。
- 翌年2月21日、
 - 磐余彦尊は従わない新城戸畔、居勢祝、猪祝を討たせた。
 - また高尾張邑に土蜘蛛という身体が小さく手足の長い者がいたので、葛網の罟を作って捕らえて殺した。
 - 3月7日以降、畝傍山の東南橿原の地に都をつくらせる。
- 更に次の年、
 - 9月24日、事代主神の娘の媛蹈鞞五十鈴媛命を正妃とした。
- 更に、次の年1月1日、
 - 磐余彦尊は橿原宮に即位し(神武天皇)、正妃を皇后とした。
- 翌年2月、論功勲章を行う。

神武東征にかかった年数

・ 古事記

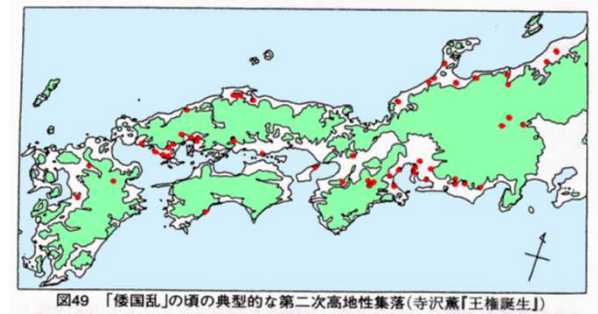
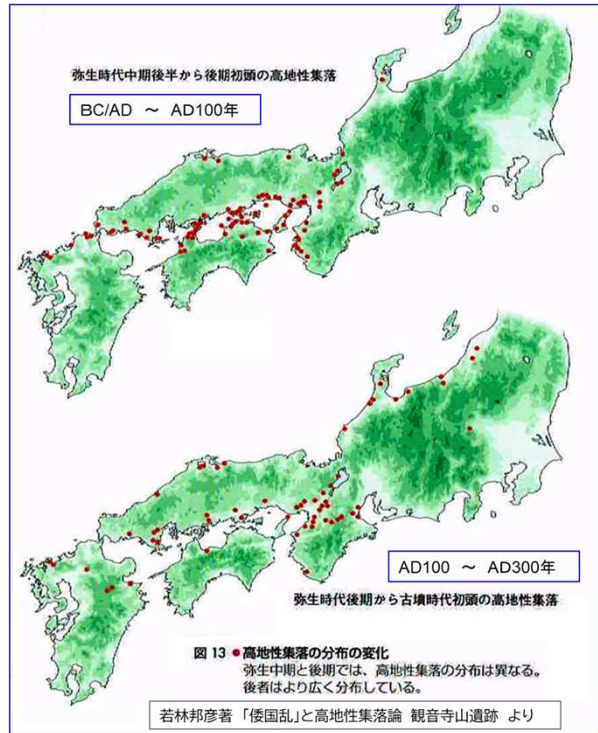
- ・ 当年：日向国を出発
 - ・ 2年目：岡田宮出発 安芸へ
 - ・ 3年目：2
 - ・ 4年目：3
 - ・ 5年目：4
 - ・ 6年目：5
 - ・ 7年目：6
 - ・ 8年目：7 安芸出発 吉備へ
 - ・ 9年目：2
 - ・ 10年目：3
 - ・ 11年目：4
 - ・ 12年目：5
 - ・ 13年目：6
 - ・ 14年目：7
 - ・ 15年目：8 吉備出発 大阪湾へ
 - ・ 6月名草邑 天磐盾に登る 暴風 遭難
 - ・ 8月 宇陀 国見丘 饒速日帰順
 - ・ 16年目：土蜘蛛討伐・ 橿原に都作る
 - ・ 17年目：事代主の娘を正妃とした
 - ・ 18年目：天皇に即位
- ・ 年数で推定し、吉備出発後は日本書紀の年月日に合わせた。

・ 日本書紀

- ・ 当年：日向国を出発
 - ・ 岡の水門/安芸
- ・ 2年目：吉備の高島
- ・ 3年目：
- ・ 4年目：
- ・ 5年目：吉備を出発 大阪湾
 - ・ 6月名草邑 天磐盾に登る 暴風 遭難
 - ・ 8月 宇陀 国見丘 饒速日帰順
- ・ 6年目：土蜘蛛討伐・ 橿原に都作る
- ・ 7年目：事代主の娘を正妃とした
- ・ 8年目：天皇に即位

- ✓ 古事記の18年と日本書紀の8年の差は、大きい。どちらが本当か直接的に判断する材料はない。
 - ✓ 穿った見方をすれば。
- ✓ 神武東征を、当初から組織的に妨げたものは、物部氏の祖先である饒速日命。長期間・執拗に妨げたことは、ケシカランことだと、後世の人々云われるので、日本書紀では、年数を短縮した。とも、見える。
- ✓ 古事記には、五瀬殺害は長脛彦の矢と記し、書紀では、流れ矢としたことも、物部氏の罪を隠したものと見える。(長脛彦の子可美真手命の直系が物部氏を率いた)

饒速日命/長脛彦軍の守備体制

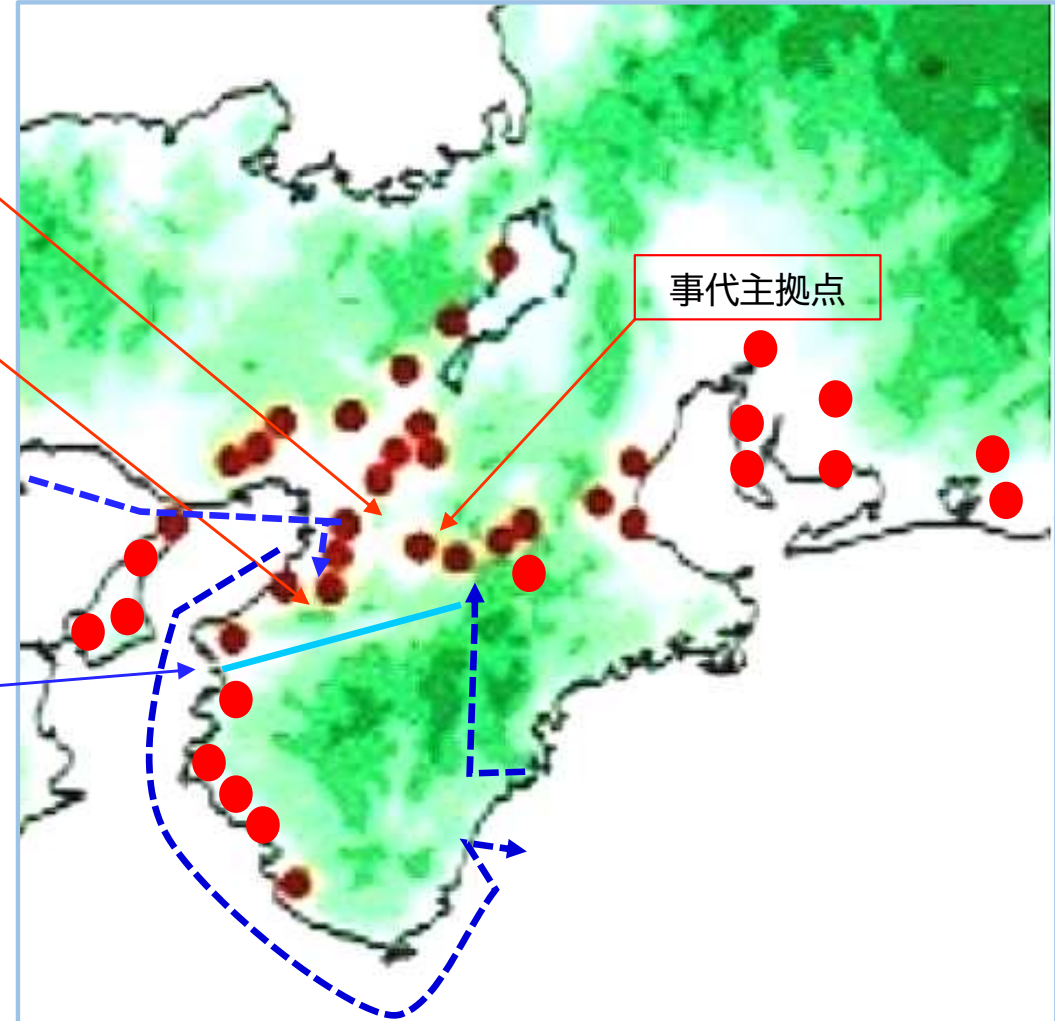


鳥見:長脛彦拠点

饒速日命拠点

事代主拠点

紀ノ川
(吉野川)

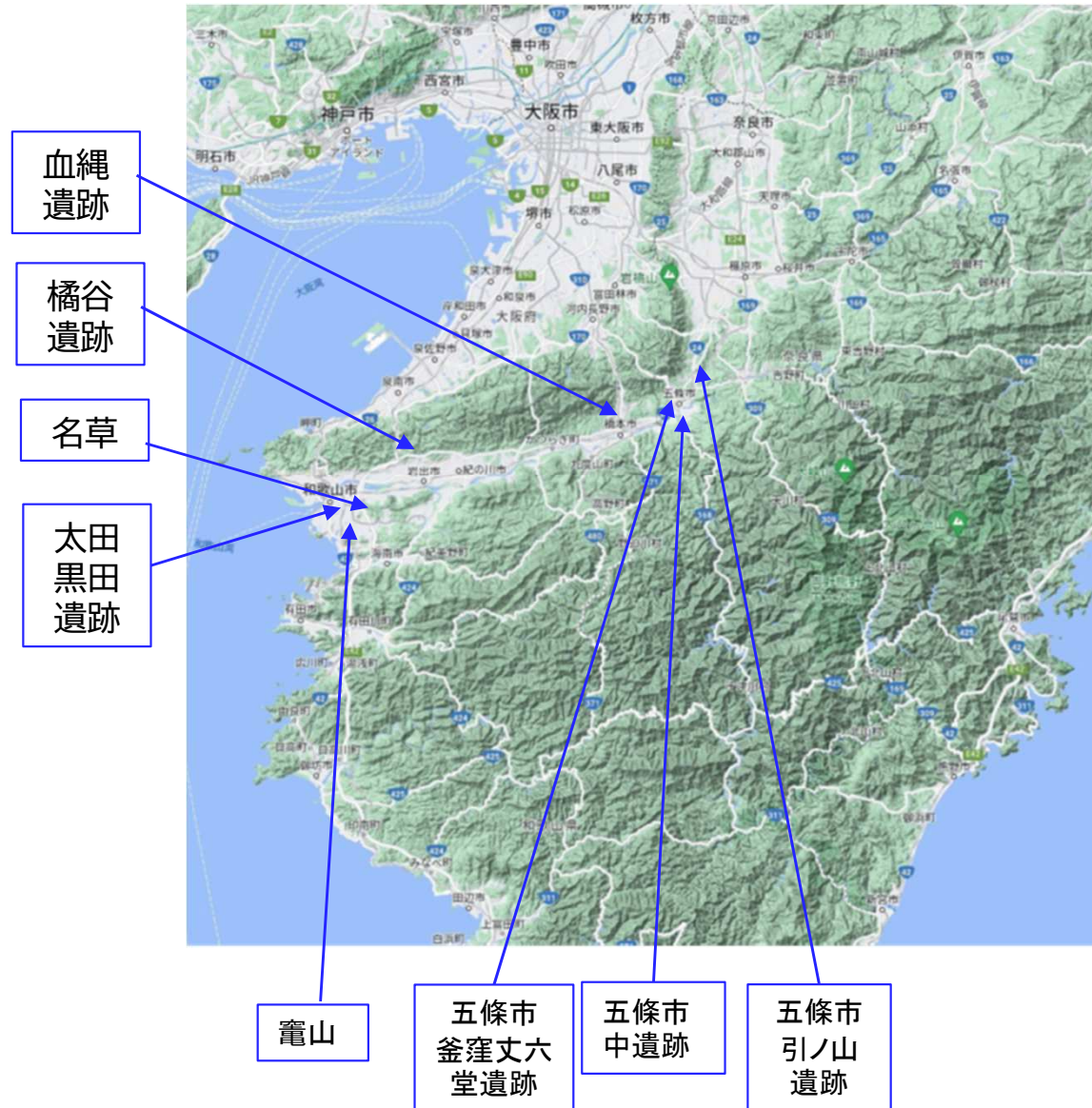


- 大和周辺に築かれた高地性集落は、沢山あり、どの方向から攻められても対応できる体制が整っていた。
 - 大阪平野一帯、特に大和川の周辺 / 和歌山県の紀ノ川(吉野川)
 - 生駒山地 / 京都側 / 奈良盆地の東側(寺沢/若林の両著書に記述の無いもの多数)
 - 桜井市・宇陀とその東側 / 三河湾沿い・浜名湖周辺
- 饒速日の拠点は、大和川の奈良と大阪の境 / 脛長彦の拠点は、生駒山の奈良側 事代主は、磯城郡 三輪山山麓

何故 紀ノ川を遡らなかったのか？

- 『神武が来た道』 和歌山平野から熊野へ 生駒市 伊東義彰 古田史学会報 2003年2月11日 No.54
- 和歌山平野から大和盆地を目指すなら、弥生時代と言えども紀ノ川流域をさかのぼる方が、熊野へ迂回して紀伊山地を横断するよりも、地形上も距離も比較にならないほど楽であり、短いことが実感できました。
 - 「よほどの理由」がない限り、何も好きこのんでわざわざ熊野へ迂回し、紀伊山地を横断しようなどとは誰も考えないでしょう。
 - 生駒山麓の戦いで敗れた神武も、初めは紀ノ川流域ルートを念頭に置いて和歌山平野に上陸したのではないのでしょうか。
- 『短距離で楽に行ける紀ノ川流域ルートがあるのに、わざわざ熊野へ迂回して紀伊山地を横断するルートを選ぶのは、「よほどの理由」があった。
- 和歌山平野の弥生時代は前期から始まっていることが、**太田黒田遺跡**(JR和歌山駅前)を例に挙げるまでもなく数多くの遺跡や出土品によって証明されています(和歌山市史)。
 - このことは「よほどの理由」を探る上で重要な意味を持っています。何故なら神武が和歌山平野に上陸したころには、そこにはかなり成熟した弥生社会があった。
 - 和歌山平野は、洪水や干害などの災害、近隣集落や**海からの襲撃者**との戦いなどに耐えて生き抜いてきた人々やその子孫たちが一〇〇年以上もの歳月をかけて築いてきた生活の基盤なのです。
 - 紀ノ川・吉野川沿いの国道二四号線が北へ向きを変えるところにある五條市までは広くはありませんが平地(河岸段丘や小さな扇状地が多い)が続いており、和泉山脈や南岸の山地から流れ出る小河川を灌漑に利用すれば稲作が出来るのです。
 - 一つだけ例を挙げますと、五條市(熊野から十津川沿いに北上するとここに出ます)中町の**中(なか)遺跡**から住居跡や環濠らしい溝を含む弥生時代の大規模な集落跡が見つかりました(平成十四年五月二十四日、朝日新聞)。
 - 中遺跡は吉野川南岸の河岸段丘平地にあって、一五棟を越える住居跡が見つっています。
 - 中遺跡から一kmほど下流の南岸にある火打ち遺跡から明治二十五年頃に、高さ三〇cmの**銅鐸**が発見(五條市史)。
 - このほか**橋本市の血縄遺跡**など、**紀ノ川流域には弥生時代の遺跡が数多く散在**しています。
- 突如、海からやって来た物騒な武装集団が上陸し、近くの弥生集落に押し掛けて食料と寝る場所を要求したとしたら、その弥生集落の人たちはどんな対応をするでしょうか。
 - その武装集団の圧力で一時は一つや二つの集落を制圧できても、知らせを受けた周辺の集落がまとまって抵抗を始めると、場合によっては「生駒山麓の戦い」の二の舞になる恐れがあります。
 - 日本書紀によると、神武たちは名草邑(なぐさむら)に至り、**名草戸畔**(なぐさとべ)という者を誅(ころ)したあと、和歌山平野から姿を消しています。
 - これなどは、神武とその武装集団が和歌山平野に形成された弥生社会の激しい抵抗と反撃にあい、和歌山平野にとどまられなかったことを意味しているのではないのでしょうか。

紀ノ川周辺の遺跡



神武東征・熊野から大和への疑問を整理

- 東征軍は、饒速日命/長脛彦が守りを固める大和へ進軍し、敗退し、紀ノ川を遡るルートも阻止され、紀伊半島南端を回り、暴風に遭い遭難。神武は二人の兄も、軍備も、兵員も失い、生き延びた息子と十数人の部下で荒坂津(丹敷浦)で救助された。
 - これからの行動を記紀の記述に従い、検討して行く。
- 丹敷戸畔を誅したことは、救助した人々を殺したことで、神武一行は、物騒な武装集団となっていたことを示している。
 - 丹敷浦から、迷い、八咫鳥の道案内で、約1か月間で、吉野/宇陀へ出た。
 - その時の神武一行の風体は、「山賊」。剣・弓矢を持ち、汚れた衣服の集団の筈
1. 吉野で、国津神の贄持の子・井氷鹿・岩押分の子が、自発的に、神武集団に参加したこと。
 - ✓ 外部からきた得体のしれない集団に、どんな時代でも、おいそれと承服して、参加することは有り得ない。
 - ✓ 本来は、自己と自己の集団を護るために戦うもの。
 2. 兄宇迦斯(エウカシ)・弟宇迦斯(オトウカシ)を神武側が呼び出し、神武側に付くことを強要し、弟が付いたこと。
 - ✓ 兄弟は、饒速日命の支配下の地域の長。
 - ✓ 同上の理由で有り得ない。
 3. 磯城・忍坂・墨坂などの戦い： 饒速日命の軍と対等に戦えるだけの多くの人(兵)を集めたこと。
 4. 天孫の印(天津端)のこと： 何故、各地の国津神が、即座に従わなければならないのか？
 - ◆ 基本的なこと：九州から来た神武一行と、近畿地方の山中で暮らす人が、話ができたように記す。
 - ✓ 弥生人が渡来した後に、数百年で、日本中で弥生人の倭語が一元的に使えたのか？ 不思議！
 - ◆ 地域で暮らしている人々にとっては、何時でも外来者は、要注意であり、危険視される。
 - ✓ 何故、直ぐに従う？
 - ◆ 天の羽羽矢とは何か？

「天羽々矢」考

- 天羽々矢に対する古代人の反応
 - 長脛彦の場合： 饒速日命が、天神(天孫族)の子だと云うことで、妹を妃として差し出し、子も生まれた。君主として仕えている。その理由は、天孫の印として「天羽々矢と歩鞮」を見せられたことだ。
 - 日本各地にいた国津神は、何時の時代からか、『天孫族の子孫が来たら、それに従う』と云う「決まり事」・「掟」を祖先から受け継ぎ、現実のものとして従う体制に有ったことを示している。
 - 吉野の国津神達/宇陀の兄弟/磯城の弟/その外の神武軍の参加者は、全て、『天孫族の子孫が来たら、それに従う』と云う決まり事に従い、命がけで参加したことになる。
- 『天羽々矢』と『天孫族の子孫が来たら、それに従う』と云う決まり事
 - 『天羽々矢』は、記紀には、神武/饒速日命の外に、天若日子が授けられたと記載されている。
 - 大国主命に従い大活躍する天若日子の情報が天孫族に伝わり、苦々しく思う天孫族の使者に、飛騨で殺された。
 - 『天孫族の子孫が来たら、それに従う』と云う決まり事に類似する記紀の記述は、天孫降臨の時の猿田毘古神の場合がある。
 - 「私は国津神。天津神の御子が降りると聞いて、案内しようと、迎えに来た。」 天孫降臨成功。
- この決まり事は、神武東征の長脛彦の具体的な記述と、吉野河の国津神三人と宇陀兄弟・磯城兄弟などの事例を考えると、天孫族が、日本全国を支配する前に、既に、日本中の国津神に広く、根深く広がっていたと推定する。
- この決まり事は、何時、どんな時に決められ、伝えられたのだろうか？
- 弥生渡来人＝倭人が、日本に到来する時期に、統率者が発し、参加者全員が承諾したと推定する。
 - 全員が承諾する状況は、どんな状況が、有り得るのか？
 - そんな状況は、倭人達の歴史の中に有ったのか？

➤ 想定できる状況を次頁に示す。

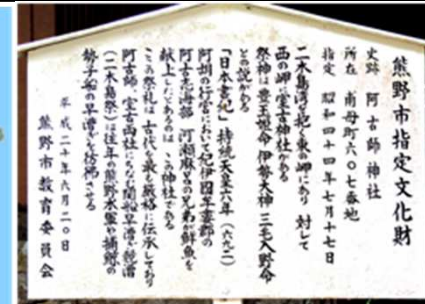
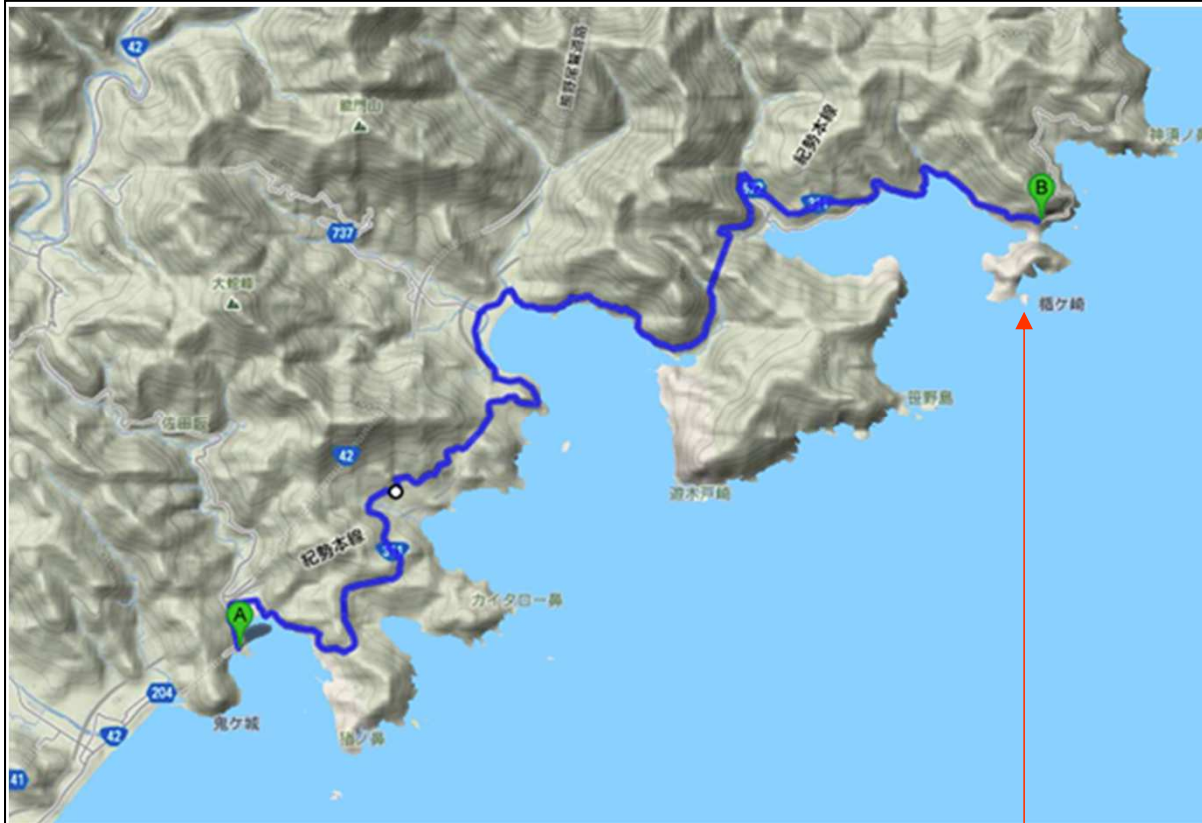
『天羽々矢』考 を想定できる状況

- 想定できる状況は、
 - 倭人全員が一同に会し、誓った。又は、
 - 倭人一族の代表者が一同に会し、誓い、代表者が一族に誓いを伝え、一族全員が誓った。
- この状況は、一般的には起こり得ない。
 - 起こり得る状況は、
 - イスラエル人(ヘブライ人)のモーゼの「出エジプト」の状況
 - 民族の置かれた危機的状況から脱出するために、指導者モーゼの言葉を信じて、その言葉に従い、全員で行動した状況。
- 倭人達にとって、そんな状況は有ったのか？
 - 中国の司馬遷の記した徐福伝承と1982年6月に発見された徐福村の伝承・56部の家系図・遺留品が示す事実。(羅其湘著「弥生の虹棧 徐福」に記載)
 - 春秋戦国で多くの民族が撲滅される中で、春秋戦国を終結させた秦の始皇帝に、徐福は見いだされ、命令を受けて東海に旅立った。
 - 徐福村に残され伝承では、徐福は親族を集めて言い聞かせた。「私は皇帝の命によって、薬探しに旅立つが、もし、成功しなければ、秦は必ず報復するだろう。必ずや、徐姓は断絶の憂き目にあうだろう。われわれが旅立った後には、もう徐姓は名乗ってはならない。」と。
 - 発見された徐福村には、徐姓を名乗る村民は一人も居なかった。
 - 「それ以来、徐姓を名乗る住民はまったく絶えた。」と古老は静かに語ってくれた。
- 出立した一族には、徐福は何も語らなかったのだろうか？(中国に残された徐一族には上記が伝わっているが)
 - 船出する前に、全員を集めたか、船長と主だったものを集めて、行動指針を伝えた筈。
 - 日本到着後は、分散して上陸するため、倭人一族全員に、上陸したら、開拓し、生き延びることができたら、その後のために、「約束・誓い」を伝えたと考えるのは、穿ちすぎだろうか。
 - 日本全国へ分散し、世代を重ねる筈の倭人達に、徐福一行の後裔の支配者(天孫)が、その土地を訪れたら、その支配者に従うようにと云い、その印は、「天羽々矢と歩鞮」だと伝えたのではないか。

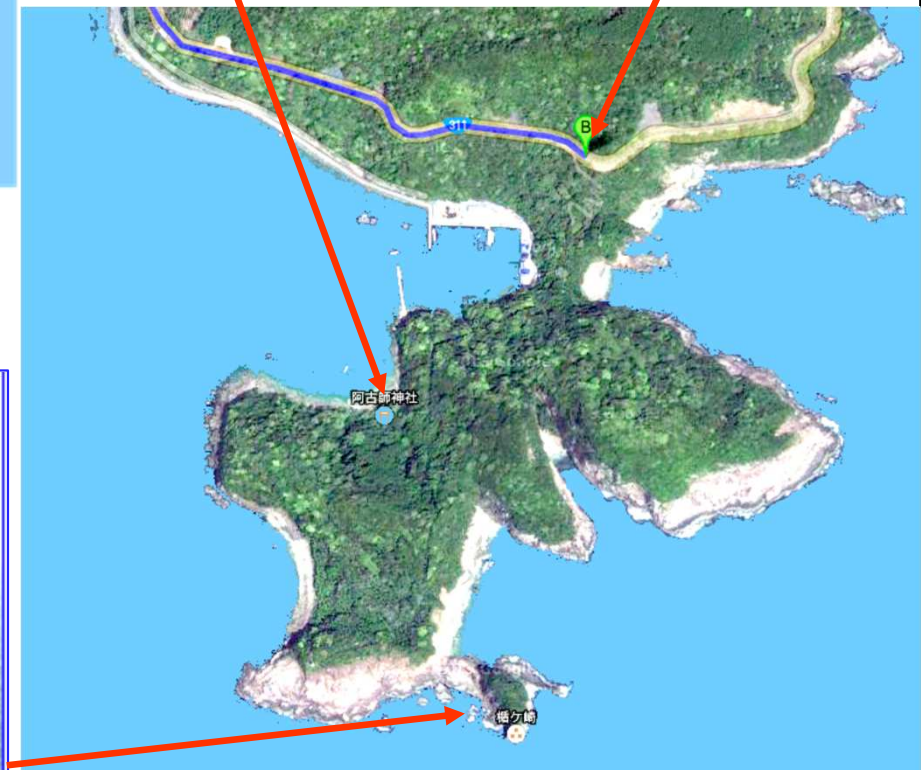
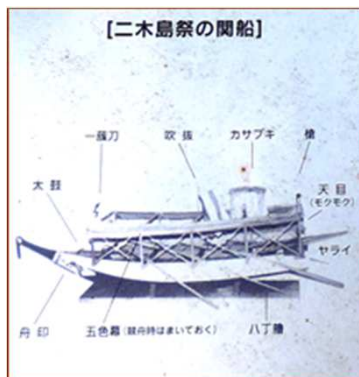
弱体の神武が勝利を得た理由

- 暴風で遭難し、船団を失い、兵と装備を失い、息子と十数人の部下しか残らなかった神武一行が、大軍を擁し、防備体制を整えた饒速日命と長脛彦の軍を破ったと記紀に記されている。
- 神武が熊野：荒坂津(丹敷浦)から大和へ進軍したルートは、饒速日命達の予想外のコースで、守備体制が整っていなかった処。しかも、大和の中心(饒速日が仕えてきた事代主の住居付近)に直行するコースであったことは、勝敗を決する上で、幸運であった。(神武達は、決してそんな事態を予測していた筈はない。)
- 進軍にあたっては、天孫の子来ると、次々に軍に加わる国津神や外の住人が集まったこと。
- 弱体の神武一行が、局地戦では対等の軍勢になったことから、敵方の大将である長脛彦の疑念を引き出し、交渉の席に付かせ、結局は、総大将である饒速日命の帰順を引き出したことで勝利できた。
 - 次々と神武軍に人が加わった理由/長脛彦が疑念を持った理由/天孫族の饒速日命が帰順した理由は、『天羽々矢』と『天孫族の子孫が来たら、それに従う』と云う決まり事。
 - 饒速日命は、自分が正当な後継者でない事を認識しており、正当な後継者に譲り、帰順した。
- 『天羽々矢』と『天孫族の子孫が来たら、それに従う』と云う決まり事は、弥生渡来人：倭人が渡来した時に全員に浸透した決まり事。
- この決まり事は、弥生渡来人を多数の船に乗せ、率いてきた徐福が発し、倭人全員が承諾した誓いと考える。
 - 但し、二回目の渡航：武器を持った兵たちは、この一回目の渡航者の誓いを、無視したものと推測する。
 - 2回目の渡航者の後継は出雲一族と考える。

参考資料 : 荒坂津（丹敷浦）について



- 神武一行の遭難/救助された場所の推定
- 日本書紀に記された地名/伝承/神社の存在などから推定。



2014年5月18日(月)友人達と訪問した記録

- 山道を降りる。看板を見つける1.9km盾ヶ崎。ダウン&アップそしてダウン。海岸線に阿古師神社を発見。境内に入ろうとすると、地元のご夫婦らしい人がお参り中。そのご夫婦が帰ろうとするところで、声をかけて来た。「脇から入らないで！ 入り口はあちら！」と。失礼しました。そのご夫婦と話をすることができました。
- 地元の人で、よく神社にお参りしているとのこと。定年後で、ゆっくりしている。神武天皇の話は、伝えられていないが、神武の兄二人がこの社と対岸の室古神社に祭られている。普通の地区は1つの神社の氏子が集うが、この甫母(ほぼ)地区は、氏子となっている神社は二つ。湾の入り口の東と西に神社があり、神武の二人の兄を祭っている。
- 昔、湾の入り口で遭難して、甫母地区の人々が船を出して救助に向かったが、二人とも間に合わず無くなった。その二人を東西に祭っている。祭りは、5月と11月の年2回。二艘の八丁艦の船で、漕ぎ出し、こちらの阿古師神社に来て、次に室古神社に行き、湾の入り口まで行き、最後は、二艘が競争して漕いで帰ってくる。
- あの競漕は辛かった。人生で一番辛いことだったと楽しそうに整った顔立ちの夫が語る。すごい美人だったと思われる優しい婦人がその夫の語る姿を懐かしそうに、嬉しそうに眺めている。2年ほど前からこの競漕はやっていない。漕ぎ手がいなくなったので。船は造船所の脇にカバーを掛けて陸に挙げてある。
- 一丁の艦には3人が付き、24人の漕ぎ手と指揮を取る人、囃す人など40人が乗り、色美しい布で飾った船が、二艘で行くのは綺麗だったと。その人も漕ぎ手の一人だった。今でも和舟の艦が漕げると。サラリーマンだったので、漁師をやっている連中に負けないように、祭りの前には数ヶ月前から身体を鍛え、鍛錬をして祭りに望んだとのこと。ご夫婦して、是非、対岸の室古神社もお参りするよう奨める。ただし、道が狭く、プリウス君では無理かな？と。古代史の旅は面白い。地元の人にこんな話が聞けるなんて！
 - 因みに、神武天皇のことを聞くと、一瞬、不快そうな表情を見せ、知らないと言。話を受け付けなかった。
- ここまでが、行程の半分。又、アップ&ダウンが続く。盾ヶ崎:盾岩が見えてくる。海に突き出した柱状節理の大岩。静かな波の日で、穏やかな、神々しい景色。かって、暴風で打ち付けられてこの岩肌へばり付いてやっと命を永らえた久米の兵士達の姿が眼に浮ぶ。
- 久米の兵達が、その後、奈良に攻め入り、勝ちが見えてきた頃に歌った久米歌がある。「神風の 伊勢の海の 大石に 這いもとろう 細螺(しただみ)の い這いもとおり 撃ちてし止まん」この岩へばり付いてやっと生き延びた久米の我々が、仲間達を沢山失った我々が、命からがら生き延び、やっと、ここまで来たと励まし、自らを奮い立たせる歌。この二木島湾は、熊野と伊勢の堺にあり、伊勢の範囲に入る。あの嵐の吹いた伊勢の海に立つ大岩に、へばりつき、這い回る小さな貝のような我々久米の一族ヨ、戦おう！ガンバロウ！と云った解釈になると思われる。
- 古事記は、こんな事態が無ければ描けない場面を記している。2千年も変わらない盾岩の姿と、その伝えを祭りの姿で現代にまで残している地元の人達を発見し、足を運んだ価値があったと充足感を得る。



室古神社の社と鳥居



『古事記』のメモ

- 神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレビコ、若御毛沼命)は、兄の五瀬命(イツセ)とともに、日向の高千穂で、葦原中国を治めるにはどこへ行くのが適当か相談し、東へ行くことにした。
- 彼らは、日向を出発し筑紫へ向かい、豊国の宇沙(現・宇佐市)に着く。
- 菟狭津彦命(ウサツヒコ)・宇沙都比売(ウサツヒメ)の二人が足一騰宮(あしひとつあがりのみや)を作って彼らに食事を差し上げた。
- 彼らはそこから移動して、筑紫国の岡田宮で1年過ごし、さらに
- 阿岐国の多祁理宮(たけりのみや)で7年、
- 吉備国の高島宮で8年過ごした。
- 速吸門で亀に乗った国津神に会い、水先案内として槁根津日子という名を与えた。

- 浪速国の白肩津[注釈 1]に停泊すると、登美能那賀須泥毘古(ナガスネビコ)の軍勢が待ち構えていた。
- その軍勢との戦いの中で、五瀬命は那賀須泥毘古が放った矢に当たってしまった。
- 五瀬命は、「我々は日の神の御子だから、日に向かって(東を向いて)戦うのは良くない。
- 廻り込んで日を背にして(西を向いて)戦おう」と言った。
- それで南の方へ回り込んだが、五瀬命は紀国の男之水門に着いた所で亡くなった。

- 神倭伊波礼毘古命が熊野まで来た時、大熊が現われてすぐに消えた。
- すると 神倭伊波礼毘古命を始め彼が率いていた兵士たちは皆気を失ってしまった。
- この時、熊野の高倉下(タカクラジ)が、一振りの大刀を持って来ると、神倭伊波礼毘古命はすぐに目が覚めた。
- 高倉下から神倭伊波礼毘古命がその大刀を受け取ると、熊野の荒ぶる神は自然に切り倒されてしまい、兵士たちは意識を回復した。

- 八咫鳥の案内で、熊野から吉野河の川尻経て、
 - 魚を捕る国津神贄持の子、尾生る国津神井氷鹿(いひか)、国津神岩押分の子に会う。「今、天つ神の御子幸行でましつ、と聞きけり、故に参向へつるこそ」
- さらに険しい道を行き大和の宇陀に至った。宇陀には兄宇迦斯(エウカシ)・弟宇迦斯(オトウカシ)の兄弟がいた。
- まず八咫鳥を遣わして、神倭伊波礼毘古命に仕えるか尋ねさせたが、兄の兄宇迦斯は鳴鏑を射て追い返してしまった。
- 兄宇迦斯は神倭伊波礼毘古命を迎え撃とうとしたが、軍勢を集められなかった。
- そこで、神倭伊波礼毘古命に仕えると偽って、御殿を作ってその中に押機(踏むと挟まれて、あるいは、天上や石が落ちてきて、押し潰すことで、圧死する罫)を仕掛けた。弟の弟宇迦斯は神倭伊波礼毘古命にこのことを報告した。そこで神倭伊波礼毘古命は、大伴氏(大伴連)らの祖の道臣命(ミチノオミ)と久米直らの祖の大久米命(オオクメ)を兄宇迦斯に遣わした。
- 二神は矢をつがえて「仕えるというなら、まずお前が御殿に入って仕える様子を見せろ」と兄宇迦斯に迫り、兄宇迦斯は自分が仕掛けた罫にかかって死んだ。その後、圧死した兄宇迦斯の死体を引き出し、バラバラに切り刻んで撒いたため、その地を「宇陀の血原」という。
- 忍坂の地では、土雲の八十建[注釈 2]が待ち構えていた。
- そこで神倭伊波礼毘古命は八十建に御馳走を与え、それぞれに刀を隠し持った調理人をつけた。そして合図とともに一斉に打ち殺した。
- その後、兄師木(エシキ)・弟師木(オトシキ)の兄弟と戦った。
- 最後に、登美毘古(ナガスネビコ)と戦い、そこに邇藝速日命(ニギハヤヒ)が参上し、天津神の御子としての印の品物を差し上げて仕えた。
- こうして荒ぶる神たちや多くの土雲(豪族)を服従させ、神倭伊波礼毘古命は畝火の白檮原宮[注釈 3]で神武天皇として即位した。
- その後、大物主神の子である比売多多良伊須気余理比売(ヒメタタライスケヨリヒメ)を皇后とし、日子八井命(ヒコヤイ)、神八井耳命(カムヤイミミ)、神沼河耳命(カムヌナカワミミ、後の綏靖天皇)の三柱の子を生んだ。

日本書紀のメモ

- 甲寅年(紀元前667年):われおもふに、彼その地は必ず以て大業を恢弘ひらきのべて天の下にみちをるに足りぬべし。けだしくにの中心もなかか。
- 10月5日:神武(磐余彦尊)は親(みずか)ら諸皇子と舟師(水軍)を帥(ひき)いて東征に出発した。
- 11月9日、筑紫国崗水門に至った。
- 12月27日、安芸国に至り埃宮に居る。
- 乙卯年(紀元前666年)
 - 3月6日、吉備国に入り、行宮(高島宮)をつくった。高島宮には3年間滞在して、舟を備え兵糧を蓄えた。
- 戊午年(紀元前663年)
 - 2月11日、難波の碕に至り、その地を浪速国と名付ける。3月10日、河内国草香邑青雲の白肩の津に至る。
 - 4月9日、龍田へ進軍するが道が険阻で先へ進めず、東に軍を向けて胆駒山を経て中洲(うちつくに)へ入ろうとした。
 - 磐余彦尊の兄五瀬命は流れ矢にあたって負傷した。
 - 5月8日、茅渟の山城水門(やまきのみなど)に至った。ここで五瀬命の矢傷が重くなり、死亡。
 - 6月23日、狭野(新宮市)を越え、熊野の神邑(新宮市)へ行き、天磐盾に登り、その後、海の中でにわかには暴風に遭い、舟は漂った。
 - 二人の兄:稲飯命と三毛入野命は遭難。
 - 神武と子の手研耳命は、荒坂津(丹敷浦)に至る。丹敷戸畔を誅した。
 - 剣を手にした神武達は、大和への進軍を開始した。
 - 山路険絶にして苦難を極めた。この時、八咫鳥があらわれて軍勢を導いた。
 - 8月2日、菟田県を支配する兄猾と弟猾の二人を呼んだ。弟磯城のみが参上し、兄磯城は兄倉下、弟倉下とともになおも逆らったため、椎根津彦が奇策を用いてこれを破り、兄磯城を斬り殺した。
 - 吉野へ行き、井光(いひかり)、磐排別(いわおしわけ)、苞苴担(にえもつ)と会う。
 - 9月5日、磐余彦尊は菟田の高倉山に登ると八十梟帥や兄磯城の軍が充満
 - 10月1日、磐余彦尊は軍を発して国見丘に八十梟帥を討った。
 - 11月7日、八咫鳥に遣いさせ兄磯城・弟磯城を呼んだ。弟磯城のみが参上し、兄磯城を斬り殺した。
 - 12月4日、連戦するが勝てず、天が曇り、雨氷(ひさめ)が降ってきた。そこへ金色の靈鷲があらわれ、磐余彦尊の弓の先にとまった。

- 長髓彦は磐余彦尊のもとに使いを送り、自分が主君としてつかえる櫛玉饒速日命(物部氏の遠祖)は天神の子で、昔天磐船に乗って天降ったのであり、天神の子が二人もいるのはおかしいから、あなたは偽物だと言った。
- 長髓彦は饒速日命のもっている天神の子のしるしを磐余彦尊に示したが、磐余彦尊もまた自らが天神の子であるしるしを示し、どちらも本物とわかった。
- しかし、長髓彦はそれでも戦いを止めなかったので、饒速日命は長髓彦を殺し、衆をひきいて帰順した。

- 紀元前662年)
 - 2月21日、磐余彦尊は従わない新城戸畔、居勢祝、猪祝を討たせた。また高尾張邑に土蜘蛛という身体が小さく手足の長い者がいたので、葛網の罟を作って捕らえて殺した。これに因んで、この邑を葛城と称した。
 - 3月7日以降、畝傍山の東南檀原の地に都をつくらせる。
- 庚申年(紀元前661年)
 - 8月16日、事代主神の娘の媛蹈鞬五十鈴媛命を正妃とした。
- 辛酉年(神武天皇元年、紀元前660年)
 - 1月1日、磐余彦尊は檀原宮に即位し(神武天皇)、正妃を皇后とした。